

GLOBAL VOYAGE



[グローバル ヴォヤージュ]



アートで巡る世界一周

第二特集

クルーズで巡り会える
世界の植物

CONTENTS

特集

文芸研究家 カジポン・マルコ・残月さん

アートで巡る世界一周 P3

墓マイラー・カジポンはどのように生まれたか

カジポンとピースボートの出会いと歩み P4

文豪ゆかりの地を訪ねる

小説の舞台に胸躍らせる P6

映画の名シーンがよみがえり

心に残るメロディが響いてくる P8

唯一無二のアートを鑑賞できるのも

世界を旅する醍醐味のひとつ P10

まだまだ紹介したい

たとえばミュージカル P12

第二特集

クルーズで巡り会える

世界の植物

クルーズでおすすめしたい世界の植物園 P13

情熱的で華やかな世界三大花木 P14

世界一周を彩る世界の花・植物 P15

東日本大震災から10年

ピースボート災害支援センターの歩み P16

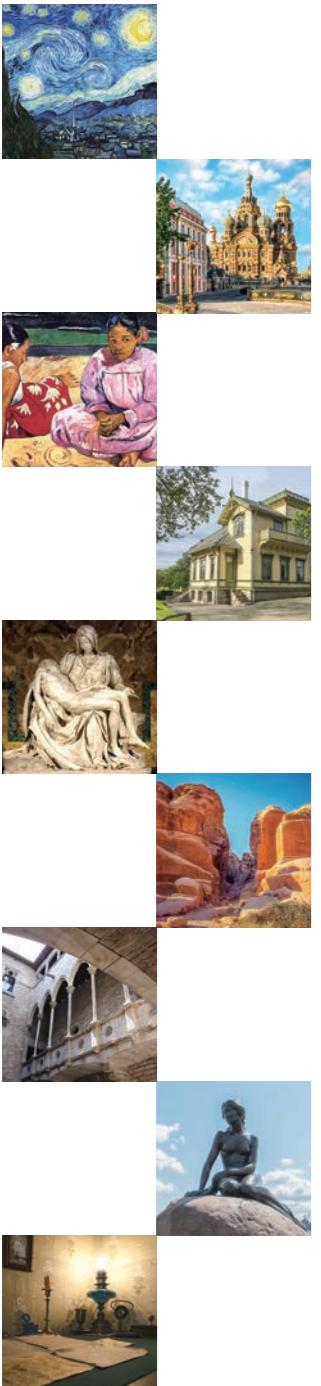
ピースボート災害支援センター10周年

東日本大震災とコロナ禍の7月豪雨災害

かつてない被災地支援について P18

アートで巡る世界一周

文芸研究家 カジポン・マルコ・残月さん



カジポン・マルコ・残月

文芸研究家「墓マイラー」。1967年生まれ。大阪府出身。大学時代に文芸研究会を旗揚げ。34年間にわたり101カ国、2500人以上の墓巡りを敢行。自らの造語「墓マイラー」は『大辞林』『現代用語の基礎知識』に掲載された。講演や執筆活動などを主な仕事とする。ペンネームは本名の梶本と「母を訪ねて三千里」の主人公の名前、マルコを掛け合わせたもの。「残月」には、文芸研究家は芸術家という「太陽」という存在があってこそ輝ける「月」のよなもの、自分はその端くれという意味を込めた。最新刊は『墓マイラー・カジポンの世界音楽家巡礼記』(音楽之友社、2020年11月)

墓マイラー・カジポンはどのように生まれたか カジポンとピースボートの出会いと歩み

スウェーデン



墓は石ではなく人そのもの
人と思っているから何度も会いに行く

カジポンさんがこれまで墓参りをした偉人は2500人以上、日本はもちろん世界100カ国以上を訪れてきた。なぜ墓参りなのか。「それは恩人に感謝の気持ちを伝えるためです。素晴らしい小説や絵画、映画を鑑賞し感動したなら、ありがとう伝えに会いに行きたいじゃないですか」とカジポンさんは言う。

墓マイラーの出発点は、旧ソ連のレニングラード（現サンクトペテルブルグ）。19歳の夏のこと。10代最後の思い出に、両親以外でこれまで最もお世話になつた人にお札を言いたい、と思つたカジポンさんが向かつたのは、ロシア文学の巨匠ドストエフスキイの墓だった。「人間の醜さやダークな部分をあらわにしながら、その裏に深い人間愛がある作品に何度も

も心を救われた」からだ。墓に触れ、「スパシーバ！（ありがとう）」と祈り、墓の下に大文豪がいると思ったとき、「本当に実在したんだ！」と思つた。「脳天からアートサンダーニングラード（現サンクトペテルブルグ）が体を貫いた」そうだ。ようやく「息ついて、辺りを見回すと、なんと斜め後ろにチャイコフスキーやムソルグ斯基」という、名だたる作曲家たちの墓が並んでいた。墓地を出るとき、カジポンさんは思った。「自分が感銘を受けたすべての芸術家に会いに行かねば」と。「私にとって墓は石ではなく人そのもの。人と思っているから何度も会いに行けるし危険な場所にも行けるのです」。それが墓マイラーの矜持である。



《ドストエフスキイ巡礼》
「私の恩人に涙の墓タッチ
をしているところです」

失恋という灰のなかに 芸術というダイヤが残つた

カジポンさんが芸術にふれるきっかけは高校時代にさかのぼる。まことに詳しくなれば彼女の気を引くことができる」と美術を猛勉強して告白するも、あえなく失恋。その後も音大生、図書館司書などに恋をするたびに音楽や文学を猛勉強するが、ことごとく失恋。その数、片手では足りないが「失恋という灰のなかに芸術というダイヤが残つた」のだ。現在は「文芸ジャンキー・パラダイス」というサイトを運営し、あらゆる芸術ジャンルの情報を発信しつつ、音楽、映画などの専門誌への執筆や講演など幅広く活躍中。そしてもちろん、ライフレークとして墓巡りを続けている。

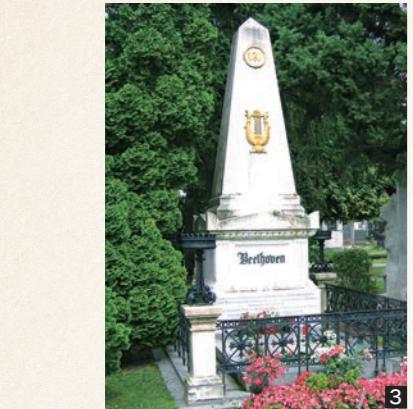
ピースボートが、墓マイラー・カジポンをつくってくれた

そんなカジポンさんとピースボートとの縁は深く、かれこれ30年以上になる。1990年、ピースボートが初めて世界一周を巡ったクルーズにも乗船している。「当時世界一周が400万円以上する時代に、90万円代で行けるなんて、まだ学生だった僕は飛びついたんです」。船内で芸術紹介の自主企画が好評を得て、その後の世界一周クルーズに再び乗船した。2000年には正式に水先案内人となり、今まで計23回のクルーズに関わってきた。

「ピースボートは普通の旅では行きかないような国、場所を訪れるし、治安や交通費の面で行きにくい国に寄港してくれる。墓マイラーの私にとって最高のパートナー。ピースボートがなければ、裕福でもない私は続けていた。

は世界を旅することもできず、現在の墓マイラー・カジポンは存在していないでしょう。たとえば、ほんの一例ですが、サモア諸島のステイブンソン、アルゼチのエビータ、キューバのチエ・ゲバラ、スリランカのアーサ・C・クラーク、などの墓は、ピースボートだからこそ行けた場所です。墓マイラーとして、文芸研究家として、ピースボートに感謝しています。そしてこれからもよろしく！」

そんなマニテツクなカジポンさんに、芸術を語りながら世界を巡る旅をナビゲートしていただく。



3



4



5

3:《ベートーベン巡礼》メトロノームの形をしている「樂聖」の墓。4:南フランスの田舎町セリニャンに眠る昆虫学者ファーブルの墓を巡礼。5:22年間の膨大な芸術情報が詰まっているカジポンさんの運営サイト「文芸ジャンキー・パラダイス」。



スウェーデンにある森の墓地スコーグスシュルコゴーデンは世界遺産に登録されている。女優グレタ・ガルボはじめ著名な人物の墓も多い。

スウェーデン

《チャイコフスキイ巡礼》
「胸像付きの墓は光が射すと
グッとドラマチックになります」



樹齢1000年を越す神秘的なバオバブの木が生息するマダガスカル。「星の王子さま」にも登場する。



『人魚姫』や『みにくいアヒルの子』をはじめとする作品で知られるアン・魚姫に会いにコペンハーゲンへ

「まだ行つたことがないけれど、ぜひ行つてみたい場所のひとつ」としてあがつてきたのがポルトガルのロカ岬。ユーラシア大陸の最西端に位置し、リスボンからバスで訪ねることができる。断崖絶壁の岬に建つモニュメントには、ポルトガルの詩人ルイス・デ・カモンイスが大航海時代のに地終わり、海始まる」という一節が刻まれている。果てしなく広がる大西洋を見渡し「地の果て」から、地球の大きさを感じてみたい。

ゆつたりと時間が流れていました」。余談だが、千年以上生きるといわれるバオバブの木も、近年は森林破壊の影響で危機を迎えており、ピースボートでは苗木を植林するプロジェクトも行っている。

ちなみに王子とサン・テグジュペリのツーショットの銅像は、故郷フランスのリヨンに建つていて。ローマ時代から栄えたこの街には世界遺産も多い。寄港地のマルセイユから鉄道で2時間。「星の王子さまには有名な『本当に大切なものは目に見えないもの旅の価値である、人との出会い、心に残る光景もまたカタチとして残らなもので、通じるものがありますね』」。

『人魚姫』や『みにくいアヒルの子』をはじめとする作品で知られるアン

地の果てで、大航海時代のロマンに思いを馳せる

「まだ行つたことがないけれど、ぜひ行つてみたい場所のひとつ」としてあがつてきたのがポルトガルのロカ岬。ユーラシア大陸の最西端に位置し、リスボンからバスで訪ねることができる。断崖絶壁の岬に建つモニュメントには、ポルトガルの詩人ルイス・デ・カモンイスが大航海時代のに地終わり、海始まる」という一節が刻まれている。果てしなく広がる大西洋を見渡し「地の果て」から、地球の大きさを感じてみたい。

文学といえば忘れてはならないのが、世界に名だたるロシア文学。カジボンさんの墓マイラーの出発点になつたドストエフスキイはじめトルstoi、チエーホフ、ブーシキンなど、文学の巨星たちとゆかりが深い都市サンクトペテルブルグは、芸術と世界遺産の宝庫で、訪れる観光スポットには事欠かない。「ツアーデの自由行動はできませんが、実はドストエフスキイ文学記念博物館やロシア文学博物館には、作家たちの筆記用具や眼鏡、パイプといった愛用品も展示され、身近に感じられてグッとくるんですね。ですから、ピースボートクルーズでそういう、ロシア文学の足跡を辿るツアーをぜひつくってほしい!と期待しています」。

デルセンは、デンマークの童話作家・詩人である。「アンデルセンの墓は、コペンハーゲン駅からトラム一本で訪ねることができます。水先案内人として乗船したとき、乗客を案内したこともあります」。コペンハーゲンの港の近くには人魚姫のブロンズ像がある。そのほか世界最古のテーマパーク・チボリ公園、シェイクスピアの『ハムレット』の舞台としても知られる世界遺産クロンボーエ城なども巡つてみたい。

『ロシア文学ツアーレを希望!』とカジボンさん



ローマにある、古代ローマの執政官ガイウス・ケステイウスのピラミッドの墓。外国人墓地にもなっており、英国のロマン派詩人キーツとシェリーもここに眠る。



ユーラシア大陸最西端のロカ岬。大西洋の風を受けて詩の一節が刻まれた記念碑が建っている。



庭園とアトラクションがセットになったデンマークのチボリ公園。アンデルセンゆかりのコペンハーゲンにある。



サンクトペテルブルグは街そのものが美術館のように美しい。ドストエフスキイ文学記念博物館には貴重な遺品が展示されている。



文豪ゆかりの地を訪ねる 小説の舞台に胸躍らせる

文学を愛する方は、名作といわれる小説や詩の舞台となった国や土地を巡るのもクルーズの大きな楽しみになる。国内外200人以上の作家、詩人の墓巡礼をしているカジボンさんが、クルーズの寄港地とゆかりある小説の舞台や作家のエピソードを紹介する。



カジボンの墓マイラー巡礼記 [文学・詩人編]



ジャン・コクトー(フランス)
多方面で活躍したコクトーの墓を納めた教会。内部にはコクトーの壁画が飾られ、コクトーが自作を朗読したテープが流れている。



アンネ・フランク(ドイツ)
『アンネの日記』の著者は、終焉の地となつたベルゲン・ベルゼン強制収容所の跡地にて姉のマルゴットと眠っている。享年15。



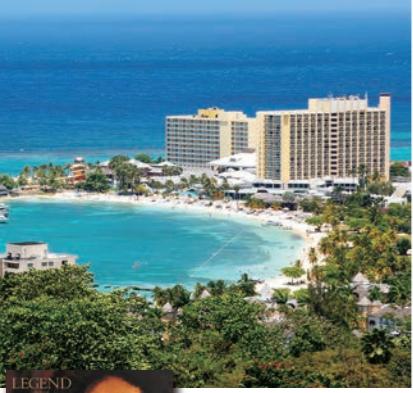
カジボンさんが「最近読んだなかで最も印象に残る作品」とするガルシア・マルケスの『百年の孤独』。その故郷コロンビアの観光都市カルタヘナ。

サン・テグジュペリの『星の王子さま』を読んだことがあるなら、マダガスカルで「ぜひ巨大なバオバブの木を見てほしい」とカジボンさんは言う。小説に登場する不思議な木が、この星にダメージを与える怖いイメージがあるが、「実際に見たマダガスカルのバオバブはどことなくユーモラスで

目に見えない大切なものを手に入れるために」

まず、船旅に船上で読むに相応しい一冊としてカジボンさんがあげたのが、メリヴィルの『白鯨』だ。アメリカ象徴であり、これは生と死の物語。読み進むうちに、あなたも船長エイハブ率いる捕鯨船ビーグラード号の員として航海し、ともに喜び、悲しみ、驚き、熱狂していくでしょう」。ジユール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』も船上読書にぴったり。「映画化もされていますが、ロンドン、エジプト、インド、香港、ニューヨークなどに寄港するクルーズなら、船旅がいつそワクワクしたものになりますよ」。

長い船旅のお供に一冊の本を。おすすめは『白鯨』



ジャマイカはかつて逆境や差別と闘った歴史がある。今はカリブ海屈指の観光地となり、訪れる日本人観光客も多い。美しい砂浜に、レゲエのリズムが刻まれる。

「チリに行くならピクトル・ハラの歌を聴いてほしい」とカジポンさん。フォークシンガー、ピクトル・ハラは、ジャマイカはカリブ海に浮かぶ小さな島。美しいリゾート地として賑わい、自然も満喫できる。流れてくるのはやはりレゲエだろう。ジャマイカの音楽シーンは世界的アーティストを輩出してきたが、レゲエの先駆者の人ボブ・マーリーのカリスマ性は格別だ。レゲエはダンス音楽ではなく、人種差別や貧困への抗議を歌詞に託し、明るい楽曲にして歌っている。生まれ故郷のナインマイルに墓があり、生家も観光スポットとして残されている。

民主化運動の英雄

「チリに行くならピクトル・ハラの歌を聴いてほしい」とカジポンさん。フォークシンガー、ピクトル・ハラは、

ジャマイカはカリブ海に浮かぶ小さな島。美しいリゾート地として賑わい、自然も満喫できる。流れてくるのはやはりレゲエだろう。ジャマイカの音楽シーンは世界的アーティストを輩出してきたが、レゲエの先駆者の人ボブ・マーリーのカリスマ性は格別だ。レゲエはダンス音楽ではなく、人種差別や貧困への抗議を歌詞に託し、明るい楽曲にして歌っている。生まれ故郷のナインマイルに墓があり、生家も観光スポットとして残されている。

民主化運動の英雄

「チリに行くならピクトル・ハラの歌を聴いてほしい」とカジポンさん。フォークシンガー、ピクトル・ハラは、

差別や貧困のない世界を訴えた不世出のシンガー

ジャマイカはカリブ海に浮かぶ小さな島。美しいリゾート地として賑わい、自然も満喫できる。流れてくるのはやはりレゲエだろう。ジャマイカの音楽シーンは世界的アーティストを輩出してきたが、レゲエの先駆者の人ボブ・マーリーのカリスマ性は格別だ。レゲエはダンス音楽ではなく、人種

差別や貧困のない世界を訴えた不世出のシンガー

「ノルウェーの作曲家グリーグの墓は、西部ベルゲンの郊外トロルハウゲンにあります。10メートルほどの崖の真ん中にあるという、世界でも珍しい墓です」。これは故郷の自然と海を愛したグリーグが、フィヨルドを望む場所にと選んだらしい。同地にはグリーグが42歳から64歳で亡くなるまで過ごした家が博物館として公開されている。大自然を前に

自然に恵まれた街の美しさがメロディに反映される

映画の名シーンがよみがえり心に残るメロディが響いてくる

時代を超えて愛される名画には、誰もが知る名シーンがある。世界中で歌われる名曲には胸に染み入ってくるメロディがある。ロケ地やアーティストにゆかりのある街を訪れると、その感動が新たになる。「おすすめしたいところは山ほどあります」というなかから、カジポンさん厳選のナビゲート。



「朝」の爽やかなメロディで知られる作曲家グリーグ。故郷、ノルウェーの西岸ベルゲンの自然の美しさ、民族性への愛が音楽に表現されているといわれている。

1:故郷リバプールにある日本語オーディオガイド完備のビートルズ・ストーリー。2:セントラルパーク内にあるスロベリー・フィールズのIMAGINEが刻まれた追悼碑。



1:故郷リバプールにある日本語オーディオガイド完備のビートルズ・ストーリー。2:セントラルパーク内にあるスロベリー・フィールズのIMAGINEが刻まれた追悼碑。



『ニュー・シネマ・パラダイス』の舞台になったシチリアは観光スポットが多い。タオルミーナの4月9日広場もその美しさで知られている。



カジポンの墓マイラー巡礼記【音楽・映画編】



ビクトル・ハラ(チリ)
民主化運動の英雄は、軍によるクーデターの際に捕われた多くの人々と共同墓地に眠り、献花が絶えることはない。



イングリッド・バーグマン(スウェーデン)
スウェーデン出身の名女優、イングリッド・バーグマンの墓。遺灰はストックホルム北靈園の両親の墓の隣に埋葬されている。



『アラビアのロレンス』の舞台になったヨルダンのワディラム(月の谷)。ロレンスが大好きなカジポンさんにとって印象的な寄港地。



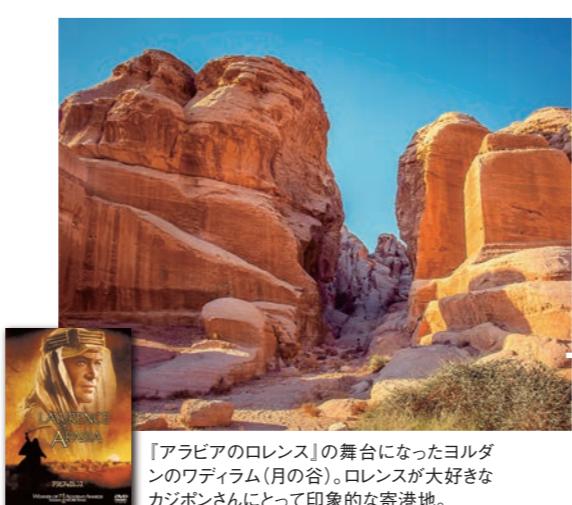
1:故郷リバプールにある日本語オーディオガイド完備のビートルズ・ストーリー。2:セントラルパーク内にあるスロベリー・フィールズのIMAGINEが刻まれた追悼碑。



ビクトル・ハラ(チリ)
民主化運動の英雄は、軍によるクーデターの際に捕われた多くの人々と共同墓地に眠り、献花が絶えることはない。



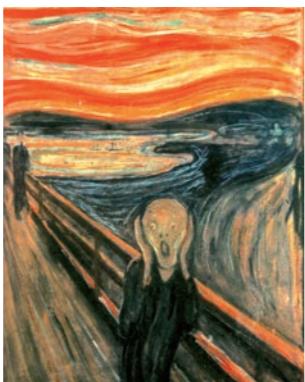
イングリッド・バーグマン(スウェーデン)
スウェーデン出身の名女優、イングリッド・バーグマンの墓。遺灰はストックホルム北靈園の両親の墓の隣に埋葬されている。



『アラビアのロレンス』の舞台になったヨルダンのワディラム(月の谷)。ロレンスが大好きなカジポンさんにとって印象的な寄港地。



ルーブル美術館のカジポンさんおすすめは17世紀の画家ラ・トゥールの「大工の聖ヨセフ」。ローソクの灯に少年キリストの指が透き通って浮かび上がり、繊細な表現に見入ってしまう。



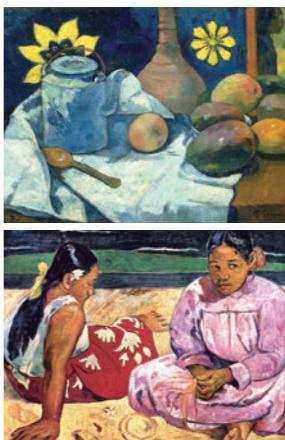
『叫び』シリーズで知られるムンク。今年オスロに新ムンク美術館が開館した。



ニューヨーク近代美術館に所蔵されカジポンさんがゴッホの最高傑作のひとつと評する「星月夜」。



ゴーギャンが創作活動の場として選んだのは地上の楽園タヒチ。この地で『タヒチの女』『マンゴーとティーポット』はじめ数々の傑作が生まれた。



「絵画は私の好きなゴーギャンから話していきましょう」。ゴーギャンの傑作の多くは晩年過ごしたタヒチで描かれている。パリで絵がまったく売れないことに嫌気がさして、最初はタヒチ島に3週間、二度目はさらにおよそ2年をかけて大理石の一枚岩から創り上げた、サンピエトロ大聖堂の『ピエタ像』をはじめ世界のヴィーナスをはじめ、世界的に著名な作品が多く公開されている。カジポンさんのおすすめは「夜の画家『ラ・トゥール』のこと。中でも『大工の聖ヨセフ』は少年のキリストが大工仕事をしている父にローソクの灯を掲げているシーンが描かれている。「私がルーブル美術館でいちばん好きなのがこの絵です。陰影の美しさが際立ち、キリストの小さな手がローソクの灯りで透けていて、ため息が出るほど素晴らしいのです」。

世界最大級の美術館で一番のおすすめ作品

ルーブル美術館は『モナリザ』『ミロのヴィーナス』をはじめ、世界的に著名な作品が多く公開されている。

カジポンさんのおすすめは「夜の画家『ラ・トゥール』のこと。中でも『大工の聖ヨセフ』は少年のキリストが大工仕事をしている父にローソクの灯を掲げているシーンが描かれている。「私がルーブル美術館でいちばん好きなのがこの絵です。陰影の美しさが際立ち、キリストの小さな手がローソクの灯りで透けていて、ため息が出るほど素晴らしいのです」。



ミケランジェロがおよそ2年をかけて大理石の一枚岩から創り上げた、サンピエトロ大聖堂の『ピエタ像』。

「バルセロナに初めて行つたのは1990年で、サグラダファミリアもまだ中心部は手付かずの近い状態でした。当時は完成まで2000年

バルセロナは世界屈指の芸術の都

ノルウェーのエドヴァルド・ムンクは『叫び』の作者として世界的に知られている。一度見たら忘れられない

インパクトのある作品だ。「ムンクの作品はオスロ国立美術館とともに知られる。『叫び』シリーズで次回訪ねてみたい

ことは今年、新ムンク美術館として生まれ変わったのであります。後者は今年、新ムンク美術館として生まれ変わったのであります。後者

世界の巨匠の作品が集まっているバチカン

バチカン市国の大聖堂に収蔵されている『ピエタ像』は

「世界最高の彫刻作品のひとつ」とカジポンさんはいう。十字架から降ろされたキリストを母マリアが抱きかかえている姿が描かれている。

「悲しみをたたえた作品は大理石で彫られているのに、まとうた布に指が入つて、生き生きとした柔らかさを感じます。人間業と思えません」。このほか世界遺産バチカンには観光、美術鑑賞の見どころがたっぷりある。



カジポンの墓マイラー巡礼記 [絵画・美術編]



ミケランジェロ(イタリア)
フィレンツェのサンタクローチェ聖堂にある墓は、「彫刻」「絵画」「建築」の三分野での偉大な実績が3人の女性で表現されている。



ゲスタフ・クリムト(オーストリア)
金色の装飾、官能美をたたえた作品でオーストリアのアール・ヌーボーの代表的存在であった。墓石は自身がデザインしたもの。

かかるといわれていましたが、3D

技術などの進歩で建築スピードが

上がり、今では大聖堂や地下礼拝堂ができ、ステンドグラスの美しさは言語を絶します」。バルセロナでは美術館巡りと街歩きを楽しんで欲しい、とカジポンさん。『ピカソ美術館は

若かりし頃の『青の時代』の作品が多いことが特徴です。ミロ美術館は1万点の作品を所蔵。街なかを歩くとガウディーがデザインしたアパートや公園、街灯と巡り会えます」。

展示されている。

「アルルの跳ね橋」をはじめゴッホの多くの絵の舞台になった南仏アラス南部のアルルでわずか2カ月間だが共同生活を送っている。ゴッホは歓迎の気持ちを込めて、ひまわりの絵を描き、ゴーギャンの部屋に

飾った。しかし共同生活の破綻が迫

り、それを嘆いてゴッホが自分の左耳を切り取ったと言われている。ゴッホはひまわりの絵を多く残しているが、ゴーギャンの部屋に飾った絵は、ロンドン・ナショナル・ギャラリーに

世界を旅すると、そこでしか鑑賞できないワン&オンリーのアートにふれることができる。圧倒的な存在感で迫ってくる絵画や彫刻。本物の芸術と向き合うことによって感嘆し、感動し、心が豊かに満たされる。巨匠、鬼才などと称されるアートの巨人の作品を味わうためにも旅に出よう。



唯一無二のアートを鑑賞できるのも世界を旅する醍醐味のひとつ

バルセロナはアートがあふれる芸術の都。ピカソ美術館やミロ美術館など巨匠の作品にもふれることができる。計画を立てて観光したい。





シンガポール植物園

2015年にシンガポール初の世界遺産として登録された。朝5時から夜中の24時まで開園しており、南国の雰囲気が楽しめる。

クルーズでおすすめしたい世界の植物園

Botanical gardens in the world

植物園は、多くの植物が展示され、花と緑に囲まれた憩いの場であると同時に学びの場もある。世界には個性的な植物園が多く存在しているため、寄港先で世界的に知られるような植物園があれば、足を運ぶことをおすすめしたい。

たとえばイギリスの「キュー王立植物園」は1759年に宮殿併設の庭園として始まり、現在は世界遺産にも登録されている。120万平方メートルの敷地には、世界各国の植物が4万種以上栽培されている。アメリカの「ニューヨーク植物園」は1891年の開館。101万平方メートルの敷地のうち三分の一が天然の落葉樹で、自然がそのまま残されている。約1万5000種の植物が栽培され、全米を代表する研究機関としても知られている。シンガポールの「シンガポール植物園」は都会のオアシスとして人気のスポット。数万本の洋ランを扱うナショナル・オーキッドガーデンや植物の進化をたどれるエボリューション・ガーデンなど見どころが多い。



キュー王立植物園

曲線的な外観が特徴の「パームハウス」が有名だが、このほか園内は気候ゾーンに分かれた展示が行われアレアな植物が多い。



ニューヨーク植物園

園内には50の庭園があり、年間を通して展示会やフェスティバルが開かれている。先端的な「植物研究所」も有している。

クルーズで巡り会える

世界の植物

クルーズの寄港地で、その国や地域ならではの植物観賞を楽しみにしている方は少なくない。自然のなかで生命力豊かに枝葉を伸ばす姿は愛らしく、各地の植物園では多様な植物を一度に見ることができるのも魅力。日本ではお目にかかるない色彩や造形との出会いからは「生命の神秘」を感じられる。



「たとえばヴィクトル・ユゴー原作の『レ・ミゼラブル』は世界中で上演されています。パリに行く前に、この作品の鑑賞をお勧めします。映画版も傑作です。」アルゼンチン大統領夫人のエバ・ペロンをモデルに波瀾万丈の人生を描く『エビータ』も世界的に知られています。「彼女は貧困層の出身で、地位ある立場になつても国民から絶大な人気を得ました。墓にも労働者階級から彼女をたたえるプレートが贈られています」。T·S·エリオットの詩集が原作の『キャッツ』も世界中でロ

ングランを続けている。このほかでは「オペラ座の怪人」、「ジーザス・クライスト・スーパー・ペースター」、「ウエスト・サイド物語」などもおすすめ。DVDで鑑賞するのもよいと思います」。

さて、カジポンさんに世界の芸術を語つてもいいながら、旅先での楽しみ方を紹介してきたが、芸術と旅の相性の良さを改めて感じてもらえたと思う。出航前から寄港地にゆかりのある文学、音楽、映画にふれておくと、世界一周の旅はいつそうおもしろく、思い出深いものになるだろう。

まだまだ紹介したい たとえばミュージカル

カジポンさんの運営サイト「文芸ジャンキー・パラダイス」を訪ねるとわかるが、カジポン・ワールドは実に幅広い。ここまで取り上げたジャンルにとどまらず茶器、仏像そしてアニメ、プロレスまで情報が満載だ。「まだ紹介したりないので、もう少しだけ、ミュージカルの話をしましょう」。



フランスの詩人、小説家ヴィクトル・ユゴー。政治家としても活躍した。パリにヴィクトル・ユゴー博物館がある。



1:ブエノスアイレスにあるアルゼンチン大統領官邸。エビータもここから演説を行った。
2:エビータの追悼碑「何百万人ものエビータとなって帰ってくる」と刻まれている。



好評発売中



カジポンさんの最新刊「世界音楽家巡礼記」(音楽の友)が発売中。世界の音楽界の巨匠たちの墓を巡礼し、彼らの功績や生き様などがまとめである。



ガラパゴス諸島(エクアドル)



オーロラ(アイスランド)



リオのカーニバル(ブラジル)

カジポンさんが
「ぜひ行ってみたいところ」

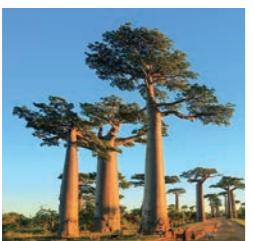
最後に、ピースボートクルーズでカジポンさんがぜひ行きたいところを3つ教えてもらつた。「まずブラジルに寄港するクルーズでリオのカーニバルに参加したいですね。あの熱狂に度身合ひたいです。次に、オーロラは死ぬまでに1回見てみたい。最近のクルーズでは船上で毎回オーロラと遭遇しているそうですね。実に羨ましい。3つめは、ガラパゴス諸島でロンサム・ジョージという名前のゾウガメの巡礼をしたい。剥製が展示される国立公園が墓になるので、そこをお参りし人生の大先輩に敬意を表したいんです(笑)」



情熱的で華やかな 世界三大花木

The world's three great flowering trees

○さまざまな分野で「世界三大○○」といったビッグ3の呼称がつけられるが、花木においても「世界三大花木」がある。「ホウオウボク」「ジャカランド」「カエンボク」の三種がそれだ。ホウオウボクはマメ科の落葉高木で、マダガスカル原産。樹形は傘形で花の色は燃えるような緋紅色になる。ジャカランドはノウゼンカズラ科の落葉樹。南米原産で50ほど種類がある。カエンボクは南アフリカ原産の常緑高木で、鮮やかな赤い色の花を咲かせる。いずれも熱帯の花木であることから、情熱的な華やかさが際立つている。世界一周中に三種類すべてと出会えれば幸運だ。



バオバブの木

[マダガスカル、南アフリカなど]

童話『星の王子さま』に登場し、マダガスカルを代表する植物。ムレンダバ郊外にバオバブの木が林立する絶景の並木道がある。



サラノキ

[インド、シンガポールなど]

2本並んだサラノキ(沙羅双樹)の下で釈迦が入滅したことから、仏教では復活・再生を象徴する聖なる樹。春に爽やかな香りの花が咲く。



世界一周を彩る
世界の
花・植物

World Flower & Plant

※季節により開花が見られない場合があります。



ウェルウィッチャ

[ナミビアなど]

アフリカのナミブ砂漠に分布。和名はキソウテンガイ(奇想天外)。植物体の直径は8メートルにもなり、寿命は1000年以上といわれる。



エリカ・アピエティナ

[南アフリカなど]

ケープタウンを見下ろすテーブルマウンテンの固有種。柔らかいモミのような葉と、枝の先端に集まって咲く管状の花が特徴。



キングプロテア

[南アフリカなど]

南アフリカ共和国の国花。乾燥した地域に生え、高さは1~2メートルほどになる。プロテア品種最大の頭状花は、現地では周年咲く。



イランイラン

[レユニオン島、フィリピンなど]

温暖な気候で咲くジャスミンに似た黄色の花からとれる甘い香りの油は、マリリン・モンローが愛した「シャネルの5番」にも使われている。



ホウオウボク

[マダガスカル、台湾など熱帯および亜熱帯地域]

日本では観賞用として温室で栽培されることが多いが、沖縄県などでは街路樹や公園樹として採用されており、高く広く広がる梢に咲く、「鳳凰」の名にふさわしい見事な開花を見ることができる。



マンゴローブ

[ジャマイカ、インドなど]

過剰な伐採や開発で急激に面積が減少している。「命のゆりかご」と例えられるように海の生物の生息、餌場、産卵場として欠かせない。



ヒース

[イギリス、アイルランドなど]

もともと荒地の意味をもち、花言葉は「孤独」。荒涼とした土地でも花を咲かせる姿に、イギリスを代表する小説『嵐が丘』が重なる。



ローズマリー

[フランス、イタリアなど]

別名ロスマリヌス(海のしづく)。その名の通り小さな花をたくさんつける。温暖な南仏プロヴァンス地方では花を観賞できる期間が長い。



ブーゲンビリア

[ギニア、ブラジルなど]

南国の雰囲気を演出する花。サントリニ島イアの街はエーゲ海の青、白い建物とブーゲンビリアの鮮やかな赤が印象的である。



ジャカランド

[南アフリカ、南米など熱帯および亜熱帯地域]

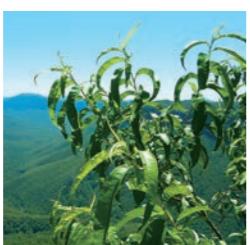
「紫の桜」「南半球の桜」といわれるジャカランドは、あふれんばかりの青紫の花を咲かせる。ブラジル産の一種は、高さが17メートルにも達し、ブエノスアイレスやチリのサンチャゴなど南米の都市では並木や庭園樹として植えられている。



レインボーシャワーツリー

[ハワイなど]

「ホノルルの木」に制定されている。ピンクやイエローが絶妙に混ざり合い、緑の葉と重なると虹のようなイメージで街路を彩る。



ユーカリ

[オーストラリア、ニュージーランドなど]

オーストラリア原産。先住民族アボリジニが昔から傷の治療に利用してきた。シドニー近郊の国立公園にはユーカリの樹海がある。



ティアレ・タヒチ

[タヒチなど]

アカネ科に属するタヒチの固有種。かのゴーギャンは画文集で「ティアレの香りをかいだ者は必ず島に戻ってくる」と記している。



カエンボク

[ハワイ、ブラジルなど熱帯および亜熱帯地域]

「火薙木」という和名は、赤色の花が咲き誇ることからきている。花はつり鐘形のチューリップのような形状で、アフリカンチューリップとも呼ばれる。世界中の熱帯地域で植えられ、花色が黄色の固体もある。



ピースボート災害支援センターの歩み

ピースボートは、国境を越えて世界各地の被災地で多岐にわたる支援活動を実施してきた。2011年の東日本大震災を受けて、災害支援を専門とするピースボート災害支援センター（PBV）を設立。これまでに約10万人を超えるボランティアと共に、海外では31カ国・国内では54地域で支援活動に携わってきた。

東日本大震災・宮城県石巻市、女川町への支援活動開始

災害ボランティアを派遣し、食事支援、清掃活動、避難所支援、漁業支援、仮設人居者支援、入浴支援など多岐にわたる支援活動を実施。



東日本大震災支援（2011年）



米国ハリケーン支援（2012年）



フィリピン台風支援（2013年）



西日本豪雨支援（2018年）



モザンビークサイクロン支援（2019年）



7月豪雨、熊本県・大分県支援（2020年）



九州北部豪雨支援（2017年）



熊本地震支援（2016年）



ネパール地震支援（2015年）



広島市土砂災害支援（2014年）



大雨災害・山口県山口市、岩手県雫石町支援（2013年）



台風12号・徳島県阿南市支援（2012年）



台風11号・静岡県西伊豆大島支援（2011年）



台風10号・岩手県岩泉町支援（2010年）



台風9号・宮城県大崎市、茨城県常総市支援（2009年）



台風8号・福島県・千葉県支援（2008年）



台風7号・福島県・千葉県支援（2007年）



台風6号・福島県・千葉県支援（2006年）



台風5号・福島県・千葉県支援（2005年）



台風4号・福島県・千葉県支援（2004年）



台風3号・福島県・千葉県支援（2003年）

福島県沖地震・宮城県山元町支援

ベトナム洪水被害支援

オーストラリア森林火災支援

モーリシャス重油流出被害支援

2020年7月豪雨、熊本県・大分県支援

モザンビークサイクロン（イダイ）支援

九州北部豪雨、佐賀県支援

大阪北部地震支援

北海道胆振東部地震支援

台風15号・19号、福島県・千葉県支援

台風15号・19号豪雨、熊本県・大分県支援

一般社団法人「ピースボートセントラル」が「ほやほや学会」に名称変更

シミュレーションゲーム発売開始

「ピースボート災害ボランティアセンター」から「ピースボート災害ボランティアセンター」に名称変更

一般社団法人「ピースボートセントラル」が「ほやほや学会」に名称変更

「福島子どもプロジェクト2019・夏 東アジア国際交流の船旅」を実施

「福島子どもプロジェクト2019・夏 東アジア国際交流の船旅」を実施

新宿区協働事業「しんじゅく防災フェスタ2018」を開催

避難所運営研修を開催

新宿区協働事業「しんじゅく防災フェスタ2017」を開催

「福島子どもプロジェクト2017・夏」を実施

「福島子どもプロジェクト2017・夏」を実施

「福島子どもプロジェクト2016・夏 東アジア国際交流の船旅」を実施

「福島子どもプロジェクト2016・夏 東アジア国際交流の船旅」を実施

「福島子どもプロジェクト2015・春 海でつながるアジア」

「福島子どもプロジェクト2015・春 海でつながるアジア」

「福島子どもプロジェクト2015・春 海でつながるアジア」

「福島子どもプロジェクト2015・春 海でつながるアジア」

「福島子どもプロジェクト2015・春 海でつながるアジア」

「福島子どもプロジェクト2015・春 海でつながるアジア」

「福島子どもプロジェクト2014・春 異文化を体験するアジア国際交流の旅」を実施

「福島子どもプロジェクト2014・春 異文化を体験するアジア国際交流の旅」を実施

「福島子どもプロジェクト2014・春 異文化を体験するアジア国際交流の旅」を実施

「福島子どもプロジェクト2014・春 異文化を体験するアジア国際交流の旅」を実施

「福島子どもプロジェクト2014・春 異文化を体験するアジア国際交流の旅」を実施

「福島子どもプロジェクト2013・春 オーストラリア」を開設

「福島子どもプロジェクト2013・春 オーストラリア」を開設

「福島子どもプロジェクト2013・春 オーストラリア」を開設

「福島子どもプロジェクト2013・春 オーストラリア」を開設

「福島子どもプロジェクト2013・春 オーストラリア」を開設

「第80回ピースボート地球一周の船旅」が石巻に初寄港

「第80回ピースボート地球一周の船旅」が石巻に初寄港

「第80回ピースボート地球一周の船旅」が石巻に初寄港

「第80回ピースボート地球一周の船旅」が石巻に初寄港

「第80回ピースボート地球一周の船旅」が石巻に初寄港

「福島子どもプロジェクト2012・夏 ベネズエラ×ロサンゼルス音楽交流プログラム」を実施

「福島子どもプロジェクト2012・夏 ベネズエラ×ロサンゼルス音楽交流プログラム」を実施

「福島子どもプロジェクト2012・夏 ベネズエラ×ロサンゼルス音楽交流プログラム」を実施

「福島子どもプロジェクト2012・夏 ベネズエラ×ロサンゼルス音楽交流プログラム」を実施

「福島子どもプロジェクト2012・夏 ベネズエラ×ロサンゼルス音楽交流プログラム」を実施

「第一回福島大学ユースプロジェクト」を実施

「第一回福島大学ユースプロジェクト」を実施

「第一回福島大学ユースプロジェクト」を実施

「第一回福島大学ユースプロジェクト」を実施

「第一回福島大学ユースプロジェクト」を実施

「災害ボランティア入門」講座を開始

「災害ボランティア入門」講座を開始

「災害ボランティア入門」講座を開始

「災害ボランティア入門」講座を開始

「災害ボランティア入門」講座を開始

「一般社団法人 ピースボート災害ボランティアセンター設立」

「一般社団法人 ピースボート災害ボランティアセンター設立」

「一般社団法人 ピースボート災害ボランティアセンター設立」

「一般社団法人 ピースボート災害ボランティアセンター設立」

「一般社団法人 ピースボート災害ボランティアセンター設立」



ピースボート災害支援センター10周年

東日本大震災と コロナ禍の7月豪雨災害 かつてない被災地支援について

ピースボート災害支援センター(PBV)の10年の歩みのなかで、ここでは東日本大震災とコロナ禍において発生した熊本の豪雨災害を取り上げる。いずれもかつてない被災地支援が展開された点に共通点があり、PBVがどのように機能したか振り返りたい。

未曾有の災害への段階的支援

ピースボートの災害支援活動は阪神淡路大震災から始まっているが、PBV設立の契機になったのは東日本大震災である。未曾有の災害が発生した6日後の3月17日にPBVスタッフは宮城県石巻市へ支援に入っている。現地の責任者を務めた現PBV理事の小林深吾さんは「被災地の壊滅的な被害のなかで支援はいくつかの段階を踏んでいました」と語る。最初は支援団体が個々に被災地に駆けつけて、できることから支援をはじめた。被災者の方々の食事、物資配布、家屋

の清掃などをはじめ、やることは山ほどあった。

「助けを求める声に応えることで精一杯の日々から定期間経つと、たとえば別々の団体が炊き出しを同じ場所で実施するといった、支援が重なってしまうケースも生じてきました。そこで石巻専修大学を拠点に支援団体がネットワークを構築していました」。そこで各団体の活動が効率的になり、それぞれの得意分野を活かした計画的な支援が展開された。小林さんは支援団体と自衛隊との連携窓口になり、さらに石巻市役所も含めた調整役を担い、毎週開かれる二者会議に参加した。「三者連携によって、よりいつそう系統だつた支援につながっていったと思いま

ます」。そうしたなかでPBVは泥だらけになった家屋の清掃、避難所の清掃、さらには漁業再開へ向けた準備、地域情報を盛り込んだ仮設住宅への新聞の発行などを行っていた。

「次の段階としては、街づくりを推進する人たちと地域連携を図りました。本当の意味での復興への取り組みに移行していったわけです。私は2016年まで責任者を務めましたが、その後は新たに「ピースボートセンターいしのまき(現在はや学舎)」を設立しバトンを渡しました。小林さんの話から、現地での支援が時とともに変化、進化していくことがわかる。

複合災害における支援の難しさ

災害支援の長い経験から、小林さんが最も感じている「進化」とは支援団体と行政、地域との三者連携の在り方だという。しかし、今回見舞われているコロナ禍ではその機能を發揮するのが難しい。昨年本誌で紹介したようにPBVは熊本県と球磨村からの要請によって避難所運営のサポートのため8月末に現地入りした。感染症対策のガイドライン、専門家のサポートなどでようやく支援が可能になつた。限られた人數で、少しづつ避難生活の改善に貢献してきたが、現地支援の絶対数が

少ないという実感もある。

「県をまたいでの移動に制約があり、災害支援に必要不可欠なボランティアによる支援が行き届きません。現地からも、片付け一つとってもスピードが遅い、という声が届きました」。被災者の方々には「支援を受ける権利」があり、本来はもつと多面的なサポートが必要ではある。しかしその一方で「新型コロナ感染症に脅かされない」という前提がある。この二つの両立が命題である。コロナ禍と豪雨という複合災害において、「手探りの支援」が続けられた。

コロナ禍の支援で小林さんが感じたのが「地域の連携の必要性」である。被災地に外部から人が入りにくい状況が発生したとき、日頃から

ボランティアのコミュニティをつくりたい

地域でネットワークをつくつておけば万の際に助け合える。コロナ禍の教訓から、今後、地域連携の大切さを訴え、全国的に広げていきたいと考えている。

最後に、個人的な考え、として小林さんから10周年を迎えたPBVのこれからについて話してもらった。「PBVでは多様な専門性をもつた人が災害支援に関わってきました。団体としては複数の専門性を持ちながら、被災者の多様なニーズに対しても手を差し伸べられる扱い手がいるほうが良いと考えています。

ベトナム洪水被害 PBV活動報告



ベトナム中部地方では昨年10月から続いた豪雨・台風によって洪水や土砂崩れなど甚大な被害を受けた。支援を必要とする人は150万人以上にのぼるとみられている。ピースボートはこれまでのクルーズで20年以上、港町ダナンに寄港し交流を重ねてきたが、その企画・運営を支えてきたのがダナン青年連盟である。今回の被害において青年連盟のメンバーは、発生直後から飲料水や日用品などの物資配布を実施してきた。ピースボートのカウンターパートナーであり、交流し友情も育んできた青年連盟をサポートしていくため、PBVとしても当初より支援を継続してきた。しかし家屋を失った方も多く被災地の再建には長い支援が必要である。今後も現地と情報交換しながら必要とされる支援を実施していく。



災害につよい社会をみんなでつくる お互いさまサポーター



災害は、いつ、どこで起こるのか予測できない。誰もが被災者になる可能性がある。PBVでは今、被災地に支援に行くことができなくても、寄付による支援を続け、もし被災した際に、助け合える「お互いさまサポーター」を募集中。お互いさまつながりで、災害と一緒に乗り越える社会をつくりたい。

1,000円~[毎月寄付]



船上百景 [社交ダンス]



カルチャースクールで毎回トップクラスの人気を誇る社交ダンス。ダンスパーティーも大盛況!



レッスンを通して友だちの輪も広がる。



世界一周を終える頃にはステップも軽やかに。

「踊つてみたい」という好奇心が、「ダンスは楽しい」という実感に変わって夢中になっていく。ブルースからジルバ、タンゴ、ワルツとマスターする振り付けも増え、いつしか船内ではレッスン仲間と自主練習している姿もよく見られる風景に。定期的に開かれるダンスパーティーや発表会は、練習の成果を披露する晴れ舞台。華やかな衣裳に身を包み、さあ楽しみましょう！

船内で開かれるカルチャースクールは多くの参加者を集めている。3ヶ月の船旅は新しいことをマスターできるチャンスでもある。なかでも人気のあるプログラムのひとつが社交ダンス。「いつかチャレンジしたかった」という人も多い。特にシニア層の関心が高く、ご夫婦と一緒に始めるケースも少なくない。初心者大歓迎の、敷居の低さも魅力だ。先生による丁寧な指導で、着実に上達するのが継続していけるポイント。「踊つてみたい」という好奇心が、「ダンスは楽しい」という実感に変わって夢中になっていく。ブルースからジルバ、タンゴ、ワルツとマスターする振り付けも増え、いつしか船内ではレッスン仲間と自主練習している姿もよく見られる風景に。定期的に開かれるダンスパーティーや発表会は、練習の成果を披露する晴れ舞台。華やかな衣裳に身を包み、さあ楽しみましょう！

『ハート・オブ・サムライ』という本が米国でベストセラーとなり、中高生から「ジョンマン」と呼ばれる日本人。幕末に活躍したジヨン万次郎といえばおわかりでしょうか。今号で登場したカジポンさんに影響され、自宅近くにある万次郎が眠るお墓へ行きました。1841年、土佐の漁師で14歳の時に漂流。捕鯨船に助けられその後は異文化のなかで英語を学び、米国の大学を首席で卒業。航海士として世界を二周した後、母親に会いたい一心から危険を承知で鎖国時代の日本へ帰国。その後、幕末の動乱期に多大なる影響を与えます。

そんな彼が漂流時にたどり着いた伊豆諸島の無人島鳥島では、水も火もないなか5ヵ月間も生き延びます。雨水を貯め、鳥や魚を食料としてサバイバルするのですが、何より彼に力を与えたのは「希望」でした。その無人島には江戸時代だけで10年に2~3組の漂流民が流され、約2000年の間に80人以上が帰還を果たしています。なかには20年間もその島で暮らした人もいました。その生還者たちが島を脱出すると、未来の漂流民に向けてそこで生き抜くための道具やメッセージを残したのです。そんな命のバトンを見た万次郎にとって、それがどれほどの希望となったことか――

未だコロナ禍で先の見えない日々が続きますが、万次郎のように「希望」をもつて、一日一日を前向きに過ごしていきたい

憧れの社交ダンス この機会にマスターしよう

